

18 歳 19 歳の思想

洞龍弥

2020 年 6 月 4 日

成人するので思考をまとめておく*¹。大学に入ってから一人暮らしを始めてから考え事が多くなった。もうすでに大学入学直後に考えていたことは明確に思い出せない。今考えていることを記録することがこの文章の目的である。あくまで現段階での思考の記録であるので、学問的な思考には成っていないし未熟な思考が推敲もなされずに残ることになると思う。

目次

1	前書き	2
1.1	構成	2
1.2	言い訳	2
1.3	内容	2
1.4	自己批判的であるべき点	3
2	幸福	3
2.1	理性的幸福	3
2.2	機能として	4
2.3	洗練されていない幸福	5
2.4	理性的幸福再考	6
3	存在	6
3.1	人間性への信仰	6
3.2	唯物論	7
3.3	不可知論	8
4	中断	8
4.1	知りたいこと	9
5	知りたいと思えなくなること	9

*¹ 途中で成人した

1 前書き

この文章に関して本題に入る前に言及しておくべきことがあるので言及しておく。

1.1 構成

この文章は思考の時系列順に書かれる予定である。時系列に添えば思考を思い出しやすい文脈を掴みながら思考を迫るからである。客観的であろうとする思考は既存の思考に対して批判的であることもあるから、現在の私は否定している思考もこの文章には書かれる。時系列順に書くことの宣言は途中まで読んでもこの文章を書いている時点の私と思考の一部を共有したことになることを意味している。

この文章は思考の対象について章を分けて書かれる予定である。章のタイトルは思考の対象とする。時系列に沿って思考の対象も変わっていったので思考の対象について章を分けることと時系列順に書かれることはほぼ矛盾しない。ただ、いくつかの例外もあるのでその時はこの文章の中に内容の重複が発生することを厭わない。

1.2 言い訳

この文章を書くに当たっていくつか諦めたことがある。この文章を読むときには以下の言い訳を覚えていてほしい。

一つ目は文章としての完成度である。この文章では表現したいことを表現したい。そこで文章が綺麗でなくても表現したいことが表現されていれば良しとした。言語能力に自信がないので綺麗な文章を目指していたら内容が疎かになってしまう。稚拙だろうが臭かろうが日本語として間違っていようが気にしない。前述した通り内容の重複もあり得る。

二つ目は思考そのものの完成度である。思考は完成していないし自己矛盾を孕んでいるかもしれないし論理の飛躍があるかもしれない。それらを正そうすればいつまでたっても文章が完成しない。現段階での思考を記録するのが目的なのだから、不完全なまま記録する。

三つ目はこの文章を書くことによる影響である。若いときに思考をまとめた文章を大人になって読んだらどうなるかとかは考えない。考えていたらやってらんないので！

1.3 内容

この文章では基本的には客観的に正しいと思われることについて語ろうとする。客観的に正しいことを知ろうとして考えたことを書く。自分の主義主張や思想的な立場を表明しようとするものではないと考えている*2。ただし、思考のモチベーションの説明のために客観的な正しさを完全に無視した表現が出てくる。客観的な正しさを求めた思考に関しては「考える」などの表現を用いて、そうではない思考のようなものに関しては「思う」だとか「感じる」などといった表現を用いる。

思考はいくつかの階層に分かれていて、思考に関するメタ的な思考も含まれる。この文章全体が一切の意味

*2 読む人間がこの文章に書かれた内容を理解した上で主義主張の表明に過ぎないと思うことは自由。個人が客観的だと思っていることに関する一般的な話

を成さない、という主張が出てくること*3についてこの時点で言及しておく。

1.4 自己批判的であるべき点

この文章は私の思想について書いてあるが、私が考える上で自己批判的であろうと努力したことについて書いておく。この文章を読む上で確実に押さえておいて欲しい。

一つ目は客観的であること。先ほども書いたが客観的な正しさを求めた。考える上で何度も先入観を排除しようとした。主観に依存しないというだけでなく、一般的な価値観や今まで持っていた世界観に依存しないよう心がけた*4。

二つ目は実感を大切にすることである。結論づけられることと実感することの間にはあまりにも大きなギャップがある。例えば「あなたはいつか死にますか」と聞かれて「はい」と答える人間のうちのくらいが実際にいつか死ぬことを実感しているだろうか。客観的な結論は実感を伴って初めて(記号列から)自分自身の話になる。実感を得て初めて考えることがいかに重要であるかを知る。実感を得て初めて気が付く思考の穴や欠点もある。

三つ目は正しくあって欲しいことは必ずしも正しくないということである。「天国がないと寂しいから天国はあると思う」と言った人がいるがそれは少なくとも論理的に破綻している。当たり前だと感じるだろう。当たり前なのだが、意外とやってしまうミスだと思う。「そんなこと言ったら今までの議論全部ナンセンスじゃん」と言って正しい主張を否定しそうになったことが私にはある。考える前に思い描いていた思考の道筋に沿わせようと無意識にしてしまうのもこの例に含む。

2 幸福

まず幸福について書く。幸福について考え始めた時期は苦しくて、自分の状況を理解し楽になりたいというモチベーションで考えていた。だから客観的な正しさは軽視されがちで論理的な飛躍は大きかった。そのような雑で原始的ともいうべき思考を書くのは、その後の思考のモチベーションや文脈になっているからである。幸福は最初のテーマであって現在まで思考全体にとって重要な位置を占めている。

幸福という語の考察前のニュアンスとしては、ここでは「ありたい状態にあること」くらいに捉えていてほしい。

2.1 理性的幸福

相反する欲求を説明しようと幸福を二つに分けて考えることにした。本能を満たし脳に快樂物質が出ること(これは比喻であって、脳のメカニズムに言及しているわけではない)*5を指す本能的幸福と、快樂物質が出ないにも関わらずそうありたいと望むような理性的幸福の二元論である。今となっては原始的なこの幸福の二元論について説明していく。

本能的幸福という言葉を私の想定するものと違う意味で解釈しているかもしれない。ここで話しているのは肉体的な快樂と精神的な快樂の対比ではない。本能的幸福はある程度広い範囲を指すと思っている。日常的に

*3 2020/03/21 時点ではまだ書いていない

*4 もちろんそれが出来たというわけではない

*5 後で否定されるのでこの曖昧さを解消しようという気はない

使われる幸福という語はここでいうところの本能的幸福に当たるだろう*6。美味しいご飯を食べて幸福だというのは当然本能的幸福に分類している。大学に合格して幸せだとか、想いが通じて幸せだとか、美しい数学の理論を理解して幸せだとか、親友が夢を叶えて幸せだとか、親の病気が治って幸せだとかは本能的幸福に分類している。幸福を「ありたい状態にあること」だとするなら、ありたい状態の分類は幸福の分類を与える。ありたい状態にあること、のうち脳に快樂物質が出ている(繰り返すがこれも比喩)状態にあることを本能的幸福と呼んでいる。正の感情を伴う幸福などと表現してもいいかもしれない。

では理性的な幸福とは何か。ありたい状態にあることのうち、脳に快樂物質が出ていない状態*7にあることを指す。これはそこまで自明な現象ではなくて、自分はこの種の幸福を明確に認識したのは18歳ごろだったと思う。例を出す。例えば、ある種の思考は理性的幸福に基づく。いくつかのテーマについては考えていると気分が落ち込み本能的不幸になる。ただ、不幸になるとわかっていても無知でいるよりは考えている方がマシだと思えることがある。この時、脳に快樂物質が出るという意味で本能的幸福でなかったとしてもその状態にありたいという状況が実現する。ここに理性的幸福がある。別の例では、仮に自己決定が何よりも尊いとする人間が意図しない死を避けるために自殺すればそれは理性的幸福のための行動と言っていいだろう。自己嫌悪を常にしたいと感じるのも理性的幸福のためだと解釈した。

このような対比は自分が考えることの正当化に使われた。考えて不幸になるなら考えないべきだ、と言った類の主張に関する答えとして、(私の中で)既存の幸福という概念であった本能的幸福とは異なる理性的幸福があり得るのだと答えようとしたのである。このような切迫した問題に対する答えであったから、本能的幸福と理性的幸福の対比はかなり雑で批判されるべき点が多い。理性的幸福と本能的幸福の違いを質的な差のように書いたが、そんなことがあり得るのかを考えていくと、そもそも幸福とは何か、幸福の本質を理解していないことが問題になってくる。

2.2 機能として

幸福とは何かという問いは自身についての問いの一種である。自身についての問いに関しては一般的で強力な手法が一つある。それは機能として捉えることである。詳しく説明していく。

自身も生物であるのだから進化を経ている。自身の身体について進化論的に語ることに抵抗はあまりないだろう。ものを掴めると進化的に有利だったから親指は他の四本の指と向きが違うのだと言われたら(その真偽は私は知らないが)受け入れられるだろう。一方精神については受け入れ難く感じるかもしれない。精神は自身でコントロールできていると感じているからだ*8。今、自由意志はあるかなどということは考えないし考える必要もない。本質的な事実是我々の根底に遺伝情報があることである。一つ好きな比喩を出す。それは遺伝情報をチェスAIのプログラムに喩え、人間をコンピュータに喩えるものである。プログラムが一度動き出せばもはやプログラム自体が直接行動を決定するわけではあるまい。その途中での学習によって様々な行動を起こすがその多くはプログラムを書いた人物が予測できるものではないだろう。評価軸も自ら作り出す。同様に人間の精神が遺伝情報で決まるかなどと考えるのではなく、遺伝的な基盤の上にあることを意識しておくべきなのである。そして、自然淘汰の過程で後天的な要素も遺伝的に洗練されるのである。自然淘汰において残る機能でないものは残らないということを考えれば、現在存在する自身の特徴は機能として説明されるべきな

*6 例えばこの文などが正しさをあまり求めていない文である

*7 後で否定されるのでこの曖昧さを解消しようという気はない

*8 この文はこの文章の内容とは大きく反している。そもそもこの文章が終わる頃にはこの文は否定されるどころか完全に意味を為さない。

のである。淘汰と呼ぶときに私は文化の淘汰も含めている。後天的に得た価値観は遺伝的な話だけでは説明されないだろう。しかしここに本質的な問題はない。なぜなら生物に限らず「残るか残らないかは、残りやすさのみによって決定される」という原理から「残っているものの性質は残りやすさの機能として説明されるだろう」という推測は妥当だと考えるからである*⁹。機能として説明されないなら説明されないこと自体が重大な謎になる。同じ理由から、原理が先にあって今回生物に適用しているのだからこの話は詳細 (DNA やら地球やら私やら) に依存しない。

幸福を機能として捉える。雑に言えば評価関数だろう。自身の状態に関して評価値を与えるシステムが幸福である。評価関数としての幸福は生まれた瞬間から持っていて、生きていく上で変化していく。繰り返すが、変化していても根底にあるのは淘汰である。生きていて変化する方向にも淘汰がかかることを忘れてはいけない。評価値の高い方向に移動しようとする動きが欲求であって幸福との組でうまく機能として働くわけである。

機能として幸福を捉えた時、幸福は個体を向きづけるものとして特徴付けられるだろう。幸福とは欲求の向く方向なのであって、個体の変化の方向である。残りやすいものが残る原理から、幸福の基本的な原理である「幸福であるとは残りやすいこと」が得られる。注釈を入れる。何度も繰り返すがこれは生まれた直後のような幸福の評価関数が遺伝子によって完全に決定されている (かもしれない) 時のみの話ではない。遺伝的に決定されないとしても変化の方向性、気取って言えば精神の自由*¹⁰の方向性にも淘汰が働くことを忘れてはならない。これはコンピュータ上で簡単に再現できる程度の原理を話している。自身の状態に関する評価関数を持った個体たちを十分時間放置すれば評価関数の値は状態の残りやすさのみによって本質的には (定数倍とか諸々は本質でない) 決定されるだろう。幸福は評価関数であり幸福は残りやすさのみによって本質的に決定される。

ここにも批判されるべき点がある。幸福の基本原理は自然淘汰による (局所) 最適化が同じ環境で十分時間なされているという仮定のもと厳密に成り立つのであって、実際はその仮定は完全には満たされていないだろう。その影響を次の節で考える。

2.3 洗練されていない幸福

前の節の説明だと「数学をすると幸福だが数学をして残りやすかったとは言えない」といった問題が起こる。前の節はいわば外部環境を固定したまま洗練時間を無限に飛ばした理想極限の話であって、理想極限との差を見つめることで基本原理を実感のレベルに落とせるわけである。

理想極限との差が発生する第一の理由は存在しうる膨大な状態数に比べ評価関数が粗いことだろう。自身の取り得る状態数は膨大である。それに対し評価関数は脳に実現されなければならない、近似的なものにならざるを得ないだろう。比喩だが、良い特徴量を取り出して計算するイメージである。

第二の理由は新しいインプットである。洗練される期間に存在しなかった状態に関しては評価関数は洗練され得ない。その場合は評価関数に想定されないインプットが入ることになる。出力は既存の状態に関する計算と同じ方法が適用されるわけで、そこでは残りやすさと評価値が一致しない現象も起こり得る。かつて知的好奇心を満たすことが残りやすかったなら現在知的好奇心を満たし続けることが高い評価値を得てもおかしくない。獲得が難しいタンパク質を摂取させようと肉を美味しく感じるようにしたとして、現代人が肉を食い過ぎても不思議ではない。

*⁹ 十分な時間洗練されていることが仮定されていたり、初期値に依存していることなどは注意

*¹⁰ そんなものがあるとは言っていない

2.4 理性的幸福再考

理性的幸福の特徴的な例で完全に理性的になりたいというものがある。生物的な欲求に一切影響されず純粋な理性として生きたら幸福だろうななどと考えたことがある。しかし、機能として幸福を捉えれば、幸福とは自然淘汰の対象に対して定義される概念であることがわかる。幸福は個体の向きづけと表裏一体なのだから、向き付けられていない個体に幸福はあり得ないのである。既存の幸福概念に囚われず考え知ることを目指しても、向きづけられている時点で幸福からは逃げられないのである。幸福は生物的な概念であり、向き付けられていない純粋に理性に幸福はあり得ない。

私にとって理性的幸福は不幸になるのに考えることの正当化だった。純粋に理性的な幸福があり得ないなら、なぜ考えたいのかという疑問が残る。生きることに^{*11}知ることや考えることは特別に思われる。それがなぜかを考える。この段落は実感をそのまま言語化したものなので思考というよりまだかなり主観的なままである。知ることによって全く違う生物のように生きることになった経験は多くの人にあると思う。知りたい考えたいという欲求は自分にとっては石より人間でありたいという欲求とほとんど同じ形をしている。人間は石より人間でありたいと思える^{*12}が石は人間より石でありたいと思えるだけの知性を持っていないだろう。それほど本質的と言うか根源的な欲求に感じられるのである。知ること考えることが特別重要だと感じるのは、知ること考えることが評価関数自体に変化を与えるからだと考えている。評価関数であるところの幸福は自身及び他の評価関数に対しても評価値を返すようなメタ性を持っていて、入力される評価関数の中で自身が一番評価値が高いと言う安定性を持っている^{*13}。知ること考えることは入力される評価関数を多く得ることにつながるからこそ優位性を持つ。このメタ的な優位性こそが考えることや知ることを特別だと思わせているのではないかと思う。

3 存在

自身の性質が機能によって説明されていく過程で、今までぼんやりと持っていた世界観は否定された。世界について正しい姿を見ようとしてみる。1章より多少抽象的になる。

3.1 人間性への信仰

世界観を改めるきっかけになったのは機能による説明によって人間性への信仰が失われたことがある。自身は人間であって、人間は単に動物であって、動物は単に自己複製の過程で良く振る舞うようになった肉塊に過ぎない。このことは理解しているつもりであっても実感するに至るのは簡単ではないだろう。自分はよく振る舞う肉塊以上の(正しくはより上の)存在^{*14}だと言う人間性への信仰を捨てなければ世界観を変えることはできないしモチベーションも薄い。

人間性の信仰を捨てるには、肉塊でないと感じる要因の一つ一つがむしろよく振る舞う肉塊の特徴として説明されることを知れば良い。幸福は先ほど書いたが、愛やら感情やらを機能として説明するとよい。ここで注意することは機能を持つことだけを説明するのでは不十分だと言うことだ。肉塊が持つべき性質が先にあり、

^{*11} 生きるとか後で議論するので一旦原始的な意味で解釈して

^{*12} 思わなくてもいい

^{*13} より良い価値観を見つけた瞬間に価値観は更新されている

^{*14} タイトルの存在とは直接関係ない

肉塊自身がそれを認識した時愛やら感情に見える必要がある。あくまで根底は肉塊である。

肉塊の性質を機能として説明する時にはいくつかの視点がある。機能は物質的に実現されている。さらに肉塊自体が機能を認識をする。肉塊の機能は実現と自己認識を伴うことを理解してほしい。単に機能と言ったときは機能の淘汰における優位性を強調している。淘汰における優位性の原理である機能が、肉塊の上に具体的な形で実現され^{*15}、肉塊自身が認識すると言う流れである。例えば幸福は個体の向きづけ用評価関数という機能であって、脳の中で何かの形で実現され、私がそれを幸福と呼んでいるのである。

ここでは例として感情について書く。残りやすさによって説明されるべきという原理によって、感情は機能であるはずである。今から書くのは私の解釈による感情の機能なので不十分な点があいくつもあろう。ただ、それは人間性の信仰を捨てることに関して本質的な問題にはならない。我々はすでに感情が機能であることを知っていて、実感に持っていくために解釈するのである。

自己複製する個体は身体的特徴も遺伝するが先天的な行動原理も遺伝するだろう。先天的な行動原理が存在しなければ生まれたばかりの子供は微動だにしないだろうしここに否定の余地はないはずだ。行動原理を遺伝によって洗練することは自然だ。先天的な行動原理の自己認知が感情であると言って良いだろう。恐怖なんかはわかりやすい例だ。成長の過程で後天的な行動原理が支配的になるにつれて子供の頃より感情の起伏が小さくなっていくのだろう。先天的な行動原理は生まれてきた世界への適応のなかでとって変わられる。

3.2 唯物論

人間性への信仰が捨てられれば、ただ物質が存在して自身は自己複製と淘汰を経て良く振る舞うようになっただけの肉塊であることを実感できるようになる。ここで多くの対象が認識に依存していたことに気がつくべきだ。ここにも理解と実感にかなりギャップがある。

物質以外の一切は認識に依存していること、誤解を恐れずに言えば存在していないことをもう一度実感しておくべきだ。意味も価値も私も生死も文字も真偽も、一切は認識の産物である。物質しか存在しない世界に自分自身が属していることを忘れてはならない。ここに書かれた文章は一切の意味を持たないし、書かれていることが正しいかすらも議論できない。時間や空間といった我々が世界を認識するための観念も当然存在しない。「A は存在するか」と言われれば「A は物質であるか」という問いに答えれば良い。何もないのである。今後私が何かに言及しても何かを書いても一切は意味をなさない。共通の錯覚を見て満足するしかないのである。我々の認識は、物質だけの世界に意味や価値があると勘違いする程度には洗練されてしまったのである^{*16}。

物質だけが存在するという主張には物質という言葉において曖昧さが残るだろう。唯物論的世界観を十分に実感した時点からポスト唯物論^{*17}的な思考に移っていく。ここで言う物質は世界を規定する情報の極小な集まりである。世界は世界の持つ情報だけから復元されるだろうから、世界を情報の集合体だと考えて大きな問題はないだろう。世界に属す情報は implication の関係が入っていて、情報 A を知っていれば情報 B は導かれるという状況があり得る。世界に属す情報のうち、implication によって世界を復元できるような (ある) 極小な部分集合体を物質と呼ぶ。つまり、世界には物質だけが存在するという主張はより正確に述べると世界を規定する情報としてちょうど物質を取ることができる、というものである。私が怒っているとか悲しんでいる

^{*15} プログラミングするときの感覚で言えば実装って感覚

^{*16} これがなぜかについてはまた考える。物質を脳に影響を与えるものへ (double dual 的に!) 一般化する時に出てくるのではないかな

^{*17} 専門用語とかではなくて私が使っているだけ

とかと言った情報は物質的に決定されている^{*18}という主張である。

世界を規定する情報の系として物質を捉えた時、存在とは相対的なものに過ぎないのではないかと感じてしまう。他に同じ特徴を持つ情報の系を持ってきた時それを存在と呼ばない正当な理由が付けられるだろうか。世界に対する記号的言及が仮に世界の状態を規定しうるなら、記号列を存在と呼び物質とは観念に過ぎないということもできるだろう。

この段落は最近の考えでまだ荒削りにも程があるのだが、世界はシステムと認識による相互作用の中で捉えるべきなのではないか。システムとは視点を一つ固定したときの状態全体のなす集まりであって状態の間に implication(\Rightarrow) の関係が入っているものである。例えば物質のなすシステムは選択された物質とその物質の状態の組がシステムの状態であって、物質の一部からの埋め込み (の方向を形式的に反転させたもの^{*19}) が implication である。(全海水, しよっぱい) や (太平洋の海水, しよっぱい) などがシステムの状態で、(太平洋の海水) \rightarrow (全海水) なる埋め込みが (全海水, しよっぱい) \Rightarrow (太平洋の海水, しよっぱい) なる implication を反変に誘導するのである。この物質によるシンプルなシステムだけでは物質を絶対的なものとする世界観しか得られない。他のシステムを導入しシステム間に認識という関係を入れることで一つ前の段落のような相対的な存在の考え方を定式化したい。他のシステムの例だが、記号的言及のシステムは記号的言及 (例えば「空は青い」など。物質のシステムでは物質の状態自体を考えていたが、今回は文字で表現している) が状態、記号的言及の論理的包含関係 (例えば「人間は死ぬ」 \Rightarrow 「私は死ぬ」など) が implication であるシステムである。システム A からシステム B への認識とはシステム A の状態をシステム B の状態に移す対応であって implication を保つものである^{*20}。

3.3 不可知論

我々は何を知ることができるのかという問いがある。この問いは徹底的に考えることが好きな人間にとっては最も重要な問いの一つである。前の節の思想のもと、結論として我々は何も知ることができない。知るという行為自体存在し得ないからである。知るように振る舞うことはできても知ることはできないのである。考えるために生きていた人間にとって、「考え知る行為をしていると思っていた間実際にはただ物質があっただけ」という事実はショッキングなものだった。この事実はこの文章のメインの主張の一つである。

実に多くの文脈で思考停止が推奨される風潮がある。例えば毎日死ぬことについて考えていれば気分は落ち込むだろうしその時間何も考えずぼーっとしてることが推奨されるかもしれない。私は 2.4 節の文脈によりこの風潮が苦手であった^{*21}。考えて知ることは石ではなく人間であろうとする行為であって何よりも重要だった。

4 中断

現在 2020/06/04 で、2 ヶ月書かず、数学に没頭して考えなくなった結果、何もなくなってしまった。何が問題でなぜ重要だったかもあまり思い出せず、続きをかけそうにないのでこの辺で終わろうと思う。ただ、絶対に書かなくてはいけないと思っていた記憶だけあるので、それだけ書いておく。現在ではもうその本質を理解できていないので、書きたかったことが書けているかは自信がない。考えなくて分かったことがあるとすれ

^{*18} 因果関係の話ではない

^{*19} 気持ちは反変な誘導

^{*20} 決して数学の話をしているわけではないが、考えたいの Poset か Bool か HeytAlg の適当な右からのスライスじゃね

^{*21} 過去形であることは現在は違うということもその逆も (少なくとも今回は) 意味しない

ば、人間はそれなりに強く意識しなければ安定状態である盲目によるコウフクに容易に移るのだということ、さらに言えばもう一度問題意識を得るのは(その思想を持っていた本人でさえ)極めて難しいのだということである。

4.1 知りたいこと

何を知りたかったのかを考える。3.3 より我々は何も知ることができないのだが、不思議だと思うフリはできる。本当に不思議なことについて共有したい*²²。世界は自然であるべきだと信じている。自然とは何を指すのかはうまく表現ができないが、Canonical であるとか一般的原理のもとにあるとか、「説明を要さない」というか、これはまた私の直感に依存するものだと思う。これは私の思想の拠り所でもある。例えば私は私以外の人間と私は多くの共通点を持っていると信じている(この主観的自我というべきものも共有されている、平たく言えばいわゆる哲学的ゾンビではないと思っている)。私は、「あなたは水槽の中の脳です。その水槽は一辺 50cm の立方体の形をしています。」と言われたら論理的に否定しようとはしないが、なぜそう思うのかとその根拠を求めたくなってしまう。自然性(、この場合だと必然性とも言い換えられそうだが)を感じられないからである。A であると主張したいときに、およそ A である正当な根拠が出せないのにも関わらず確信的にそれを否定したくなることがあり、それを自然性による肯定と呼びたいのである。

そして、自然でないように感じられることであって実際に実現しているように思われることがいくつかある。雑に言えば直感に反する現象である。ここには当然疑問があるわけで、重要な問いのクラスである「自然であるべきなのになぜ自然でない(ように見える)のか」を与える。このクラスの疑問は自然性というなんとも主観的な概念に依存しているから、他人と共有できる確信はない*²³。

最初の問題は「なぜ何も存在しないのではなく何かが存在するのか」である。何も存在しないのが世界の状態として canonical であるのは否定の余地がないように感じられる。何も存在しないのではなくなぜ何かが存在するのかについては私が存在する条件のもとで考える人間仮説のような思考法もあるだろうが、私にとって解決になっていない。より強い条件である私の存在についての疑問に変換されただけである。

そして、なぜ主観的な自我が存在する(ように思われる)かである。我々はよく振る舞う肉塊であるのだから、今私の持つこれ、無理に言語化するなら主観的な世界、主観的な自我が存在するのは不自然に思われる。念のため書いておくが、これは別に脳の物質的なシステムが完全に解明されることによって解決する問いではない。私はある私とよべる何かの世界の中に実現されているような感覚がある。これは、あなたが生きている(と普通言われる)状態とあなたが死んでいる(と普通言われる)状態の間に差があるように思われるなら同意してくれるだろう。そして、考えるとその存在は不自然ではないだろうか。物質 A がただ物質として時間発展の中でよく振る舞ったとして、A がうまく機能しなくなることについて A 自身が喪失を認識する(この表現自体今言う主観的自我を仮定したものである)とは奇妙な話である。ここには説明がなされるべき問題があるだろう。

5 知りたいと思えなくなること

実感として、知りたいと思えなくなっている。一年前は精神的な苦痛によってこれらの問題が緊急のものとして現れていて、生きることと考えることはほぼ同じ行為であったような記憶がある。苦痛があって初めて中

*²² できないと思っているが

*²³ だが、共有できなかったとして私からの主観に依存していることが理由であることは少ないだろう

身と熱を持った思想であった。一番なりたくない状態になってしまった。文中から引用すれば石である。しかし、最初から何もなかった。唯一大切だと思っていた知ることそもそももあり得ず、向きづけは形式的な幸福の機能であった。どうしていいのかわからないということすらできない。もうただあるしかない。